

世代間交流と社会関係資本の継承

—長野県須坂市調査と首都圏2自治体調査の比較からの知見⁽¹⁾—

稲葉 陽二 藤原 佳典 小林江里香 野中久美子
 倉岡 正高 田中 元基 村山 幸子 松永 博子
 安永 正史 村山 洋史 渡辺修一郎

1. はじめに

本研究ノートは、東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健チーム（部長 藤原佳典）が実施した東京都首都圏A区における「世代間交流・互助の意識と実態に関する調査」、川崎市首都圏B区における「多世代が安心して暮らせる地域づくりに向けた調査」および筆者が実施した長野県須坂市における「多世代が安心して暮らせる地域づくりに向けた調査」の3調査の比較を行うものである。本稿では、今後の研究のための予備的考察として、長野県須坂市と首都圏2自治体との記述統計の比較がなされているが、優劣の評価を行うのではなく、地方と首都圏の違いの検討を通じて、住民も含めた地域の特性に応じた施策を議論する際の参考資料を提供し、それぞれの自治体における政策課題の抽出の一助となることを目的としている。

首都圏2区の調査票は、社会参加と地域保健チームが新たに開発し、筆者も参加した。倫理的配慮として、それぞれ、首都圏A区調査と首都圏B区調査は東京都健康長寿医療センター研究所の研究部門倫理委員会の承認（健経第1042号平成28年6月1日受審、受付番号5）を得ている。また、須坂市調査の調査票は、首都圏A区・首都圏B区調査の調査票

の開発者の許可を得て、須坂市役所の検討も踏まえて改訂したものを
用いて、別途日本大学スポーツ科学部の調査倫理委員会による倫理面
からの審査を受審し、承認（平成29年2月9日受審、受付番号2017-017）
を得ている。いずれの調査においても、調査票とともに送付した依頼
状には、回答は任意であり、協力しない場合でも不利益はないこと、
得られたデータは個人の名前と切り離して統計的に処理し、研究・当
該自治体の施策推進の目的以外では使用しないことを明示した。

なお、首都圏A区調査と首都圏B区調査はJST/RISTEX（研究代表
者 藤原佳典）の、須坂市調査はJSPS 挑戦的研究（萌芽）（課題番号
17K18592 研究代表者 小藪明生）の助成をそれぞれ得て実施したもので、
いずれも筆者が研究分担者として参加している。

2. 調査の概要

2.1 調査目的

本調査は、世代間継承・交流を社会関係資本、健康と結びつけて調
査するわが国で初めての試みである。社会関係資本と心と身体の健康
との関係についてはすでに多数の実証研究がなされており⁽²⁾、筆者も
含めた社会関係資本論者の多くは社会関係資本がコミュニティレベル
でも存在し、それが人々の健康に影響するという仮説を提唱している⁽³⁾。
この仮説を実証するには、コミュニティレベルの社会関係資本がどの
ように維持され、世代間で継承されるかについての機序を明らかにす
る必要があるが、この点に関する実証研究はきわめて限られている。
本調査はこのコミュニティにおける社会関係資本、社会関係資本の世代
間継承に関するデータを得るために実施された。

2.2 調査実施期間ほか（図表1）

調査実施期間は、首都圏A区調査と首都圏B区調査は2016年8月
から9月に、須坂市調査は2018年2月から3月に実施された。また、

図表 1 調査概要

	須坂市調査	首都圏 A 区調査	首都圏 B 区調査
調査実施期間	2018 年 2 月 23 日～ 3 月 30 日	2016 年 8 月 24 日～ 9 月 12 日	2016 年 8 月 3 日～28 日
調査方法	郵送法 (配布・回収とも)	同左	同左
母集団	平成 30 年 2 月 1 日 現在で 20 歳以上 80 歳未満の須坂市民	平成 28 年 7 月 1 日 現在で 25 歳以上 85 歳未満の区民	平成 28 年 6 月末 現在で 25 歳以上 85 歳未満の区民
対象者	4,000 名	6,360 名	6,740 名
サンプリング 方法	住民基本台帳からの 二段階無作為抽出 (抽出は須坂市が実施)	同左 (抽出は首都圏 A 区が実施)	同左 (抽出は首都圏 B 区が実施)
調査配票数	4,000 票	6,360 票	6,740 票
有効回収数	2,230 票	2,070 票	2,284 票
有効回収率	55.8% (2,230 票/ 4,000 票)	32.5% (2,070 票/ 6,360 票)	33.9% (2,284 票/ 6,740 票)

調査対象年齢は首都圏 2 区調査が 25 歳から 84 歳を対象としているのに対し、須坂市調査は 20 歳から 79 歳までを対象としている。住民基本台帳から須坂市では 4,000 票、首都圏 A 区では 6,360 票、首都圏 B 区では 6,740 票を無作為抽出し、郵送法 (配布・回収とも) で実施した。抽出はそれぞれの自治体の実施した。有効回収率は、須坂市 55.8%、首都圏 A 区 32.5%、首都圏 B 区 33.9%であった。

2.3 調査項目

具体的な設問は以下のとおりである。

2.3.1 世代間継承・交流について

世代間交流

会話をする機会

- (1) 子どもや 10 代の若者と (2) 20～40 代くらいの人と
(3) 50～60 代くらいの人と (4) 70 代かそれより高齢の人と

ちょっとした手助けをする／してもらう、心配事や悩み事を聞く／聞いてもらう

- (1) 20～40代に対して／から、(2) 50～60代に対して／から
- (3) 70代以上に対して／から

世代間継承に関する考え

回答者の人生に関する「考え」

- (1) 新しい事や、新しい方法をつくりだしたい
- (2) 自分の経験を他の人と分かち合いたい
- (3) 若い人たちの良き助言者になりたい
- (4) 将来にわたって他の人のためになるような何かをしたい

回答者の人生における「行動」

- (1) 自分の人生について若い人たちに語ることで、彼らを支援すること
- (2) 自分自身の経験を若い人たちに語ること
- (3) 若い人たちにアドバイスをすること
- (4) 他の人に影響を与えるようなこと

回答者の人生について「現在どのように感じているか」

- (1) 地域に役立っている気がする
- (2) 功績として残せることをしている気がする
- (3) 世の中に恩返しをしている気がする
- (4) 他の人々の人生に影響を与えている気がする

2.3.2 社会関係資本について

構造的な社会関係資本

友人・知人・近所・別居の家族や親戚とのつきあいについて

対面でのつきあいの頻度、非対面でのつきあいの頻度

会・グループ等の参加頻度

- (1) 自治会・町会 (2) 趣味・学習・教養のグループやサークル
- (3) スポーツ関係のグループやクラブ (4) ボランティア・市民活動団体・NPO
- (5) 育児サークル (6) 子ども支援関係の組織 (PTA・おやじの会・子どものクラブ活動・子ども会等)
- (7) 老人会・

- 老人（高齢者）クラブ (8) 同窓会や退職者の会（OB・OG会）
 (9) 業界・同業者団体 (10) その他

認知的社会関係資本

一般的に人は信頼できる

多くの場合、人は他人の役に立とうとする

近隣の人には信頼できる

多くの場合、近隣の人には他人の役に立とうとする

年代別一般的信頼

- (1) 子どもや10代の若者 (2) 20～40代くらいの人
 (3) 50～60代くらいの人 (4) 70代かそれより高齢の人

自分と背景が似ている人（性別、世代、暮らしぶりなどが同じような人）
 とのつきあいが多いか、異なる人とのつきあいが多いか。

2.3.3 健康・身体機能・生活面の支援などについて

自分の健康について（主観的健康 self-rated health SRH）

精神的健康について（WHO-5）

最近2週間の自分自身について

- (1) 明るく、楽しい気分で過ごした
 (2) 落ち着いた、リラックスした気分で過ごした
 (3) 意欲的で、活動的に過ごした
 (4) ぐっすりと休め、気持ちよくめざめた
 (5) 日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった

老研式 IADL 指標—日常生活の活動能力（手段的日常生活動作能力

Instrumental Activity of Daily Life、IADL）について

- (1) バスや電車を使って一人で外出できますか
 (2) 日用品の買い物ができますか
 (3) 自分で食事の用意ができますか
 (4) 請求書の支払いができますか
 (5) 銀行預金、郵便貯金の出し入れが自分でできますか

- (6) 年金などの書類を書くことができますか
- (7) 新聞を読んでいますか
- (8) 本や雑誌を読んでいますか
- (9) 健康についての記事や番組に関心がありますか
- (10) 友達の家を訪ねることがありますか
- (11) 家族や友達の相談にのることはありますか
- (12) 病人を見舞うことはできますか
- (13) 若い人に自分から話しかけることはありますか

基本的な日常生活動作について

歩行・食事・入浴・着替え・排泄（トイレに行く）などはすべて一人でしているか

- (1) 介助なしに一人でしている
- (2) 手を貸してもらするなど、一部介助を必要としている
- (3) 全面的に介助を必要としている

地域での子育て支援について（子育て支援尺度）

- (1) 近所の子どもと道で出会ると、あなたのほうからあいさつしたり、声をかけたりする
- (2) 子どもが、良いおこないをしているのを見かけて、子どもや親をほめる
- (3) 子どもが、良くないおこないや危険なことをしているのを見かけて、注意する
- (4) 近所の子どもを預かったり、子どもの遊び相手になったりする
- (5) 子育て中の親の苦労をねぎらったり、がんばりをほめたりする
- (6) 子育ての悩みに耳を傾けたり、相談にのったりする
- (7) 子育て中の人や子ども連れの人に、手助けを申し出る（「手伝えることがあれば知らせてください」と伝えるなど）

介護保険の認定について

病気・障害歴について

2.3.4 回答者について

性別、年齢、居住年数、居住形態、最終学歴、暮らし向き、世帯収入、職業、雇用形態、同居人の人数、など。

3. 記述統計の比較

以下、高齢者（65歳以上）と若年壮年（64歳以下）に分けて記述統計の比較を行うが、図表1に示すように、首都圏A区調査と首都圏B区調査は25歳以上85歳未満を調査対象としているのに対し、須坂市調査は20歳以上79歳以下を対象としているので、図表2を除き、以下で用いる記述統計は年齢階層を25～49歳、50～64歳、および65歳～79歳、の3区分として同じ年齢階層間で比較している⁽⁴⁾。

3.1 回答者の属性（図表2）

回答者の性別はいずれの調査でも男性が4割強、女性が6割弱を占めている。年齢階層別では、須坂市は65歳以上がほぼ4割を占め、須坂市調査の対象年齢階層が首都圏自治体2区よりも5歳若いにもかかわらず、平均年齢も56.5歳と首都圏2区よりも高齢である。

世帯収入は3地区いずれでも300～500万円未満の比率が2割前後で最頻値であるが、年齢階層別の累積比率からみれば、中央値は須坂市が470万円前後、首都圏B区が500万円前後、首都圏A区が520万円前後と推計される⁽⁵⁾。700万円以上の比率は、須坂市、首都圏A区、首都圏B区がそれぞれ15.6%、23.2%、22.6%となっている。ただし、所得に関しては「わからない」と「無回答」が1割前後に上り、誤差も大きいものと思われる。

最終学歴の最頻値は、須坂市と首都圏A区は高校であるが、首都圏B区は大学である。中央値は須坂市が高校、首都圏A区と首都圏B区は短大・専門学校となっている。大学以上の比率は須坂市が2割弱、首都圏A区と首都圏B区は4割弱となっている。

図表2 記述統計—回答者の属性 含む無回答 (%)

指標	2018年須坂市		2016年首都圏A区		2016年首都圏B区	
	n	%	n	%	n	%
性別						
男性	957	42.9	857	41.4	950	41.6
女性	1,241	55.7	1,213	58.6	1,334	58.4
年齢 平均値	56.5		55.6		55.4	
25-49	736	33.0	783	37.8	874	38.3
50-64	605	27.1	555	26.8	633	27.7
65 ≥	889	39.9	732	35.4	874	34.0
世帯収入 (万円)						
100 >	74	3.3	64	3.1	82	3.6
100-200 未満	201	9.0	211	10.2	206	9.0
200-300 未満	392	17.6	300	14.5	349	15.3
300-500 未満	520	23.3	412	19.9	505	22.1
500-700 未満	384	17.2	344	16.6	384	16.8
700-1000 未満	224	10.0	269	13.0	329	14.4
1000 ≤	124	5.6	211	10.2	187	8.2
居住年数						
5年未満	128	5.7	346	16.7	301	13.2
5～10年未満	105	4.7	193	9.3	244	10.7
10～20年未満	229	10.3	248	12.0	413	18.1
20～30年未満	304	13.6	226	10.9	413	18.1
30～50年未満	710	31.8	588	28.4	603	26.4
50～60年未満	302	13.5	238	11.5	180	7.9
60年以上	424	19.0	205	9.9	103	4.5
最終学歴						
小・中学校	273	12.2	176	8.5	164	7.2
高等学校	1,007	45.2	671	32.4	660	28.9
短大・専門学校	513	23.0	412	19.9	544	23.8
大学	356	16.0	664	32.1	763	33.4
大学院	27	1.2	87	4.2	105	4.6
居住形態						
持家 一戸建て	1,863	83.5	772	37.3	950	41.6
持家 集合住宅	10	0.4	431	20.8	525	23.0
借家	312	14.0	818	39.5	759	33.2

居住形態は、須坂市では回答者の8割以上が一戸建て持ち家で、集合住宅の持ち家はほとんどなく、借家も14%にすぎない。これに対して、首都圏A区と首都圏B区の一戸建て持ち家は4割前後となっており、集合住宅の持ち家居住が2割強、借家が3割から4割を占めている。また、須坂市では居住年数10年未満が1割程度であるのに対し、首都圏2区では約4分の1を占めている。逆に居住年数50年以上は、須坂市で3割強、首都圏A区で2割強、首都圏B区で1割強となっている。回答者の最頻値はいずれの地区でも30年～50年未満であるが、中央値は須坂市40年、首都圏A区31年、首都圏B区25年と推計される。

3.2 社会関係資本

本稿における社会関係資本の定義は「心の外部性を伴った信頼・規範・ネットワーク」（稲葉 2005）としているが、具体的には人や組織の間のネットワークという構造的な社会関係資本と、信頼や規範などの認知的なものに分かれる。

構造的な社会関係資本としてネットワークを郵送法で測ることは困難であるので、一般には友人・知人・親戚などとのつきあいの状況（図表3-1）と団体参加（図表3-2）をもって代替している。

図表3-1は、親族・友人・知人とのつきあいを、直接会ってのもの、電話・メール・ファックスなどを通してのものに分けて尋ねたものである。65～79歳、50～64歳、25～49歳に分けて示しているが、須坂市の65歳以上では、「月に1回より少ない／全くない」の比率が、友人・近所と電話メールが須坂（20.9%）よりA区（20.7%）のほうが低い以外は、どの項目でも総じて首都圏2区に比して低い。また、64歳以下でも須坂市は、「別居の家族・親戚と会ったり一緒に出かける」で「月に1回より少ない／全くない」の比率が4割程度と、首都圏2区の5割前後と比べて大幅に低い。

図表3-2は、構造的な社会関係資本のなかの団体参加に関する問への

図表 3-1 社会関係資本—友人・近隣・親族とのつきあい 除く無回答 (%)

65～79歳		週2回以上	週1回程度	月に2～3回	月に1回程度	月に1回より少ない/全くない	合計 (%)
友人・近所の方と会ったり一緒に出かける	須崎市	25.5	17.9	18.2	17.6	20.8	100.0
	首都圏A区	28.2	16.1	17.2	14.2	24.2	100.0
	首都圏B区	24.0	15.4	17.1	17.1	26.3	100.0
友人・近所の方と電話やメール、ファックスをする	須崎市	26.4	19.7	17.5	15.5	20.9	100.0
	首都圏A区	30.1	15.2	18.6	15.3	20.7	100.0
	首都圏B区	28.0	16.8	17.7	16.3	21.2	100.0
別居の家族・親戚と会ったり一緒に出かける	須崎市	10.8	13.0	15.2	27.1	34.0	100.0
	首都圏A区	10.8	9.2	12.1	25.4	42.6	100.0
	首都圏B区	8.5	10.7	13.7	26.8	40.3	100.0
別居の家族・親戚と電話やメール、ファックスをする	須崎市	19.8	15.4	21.7	21.9	21.2	100.0
	首都圏A区	19.9	13.1	17.4	22.0	27.7	100.0
	首都圏B区	18.7	14.1	20.7	23.7	22.7	100.0
50～64歳		週2回以上	週1回程度	月に2～3回	月に1回程度	月に1回より少ない/全くない	合計 (%)
友人・近所の方と会ったり一緒に出かける	須崎市	8.2	8.1	16.7	25.3	41.8	100.0
	首都圏A区	11.2	12.3	14.2	22.1	40.2	100.0
	首都圏B区	10.3	9.6	14.7	22.6	42.8	100.0
友人・近所の方と電話やメール、ファックスをする	須崎市	16.6	11.9	22.2	17.5	31.9	100.0
	首都圏A区	22.3	13.6	13.9	16.0	34.2	100.0
	首都圏B区	17.8	12.1	17.4	16.2	36.5	100.0
別居の家族・親戚と会ったり一緒に出かける	須崎市	8.1	10.3	15.6	26.4	39.6	100.0
	首都圏A区	8.0	9.3	12.9	22.2	47.6	100.0
	首都圏B区	7.6	10.2	11.5	22.3	48.4	100.0
別居の家族・親戚と電話やメール、ファックスをする	須崎市	16.9	13.2	20.7	22.6	26.5	100.0
	首都圏A区	18.1	14.6	16.8	23.0	27.5	100.0
	首都圏B区	18.1	16.5	18.4	20.4	26.7	100.0
25～49歳		週2回以上	週1回程度	月に2～3回	月に1回程度	月に1回より少ない/全くない	合計 (%)
友人・近所の方と会ったり一緒に出かける	須崎市	6.5	8.4	15.5	25.4	44.3	100.0
	首都圏A区	8.9	13.3	16.6	19.0	42.1	100.0
	首都圏B区	10.4	10.1	15.9	24.2	39.5	100.0
友人・近所の方と電話やメール、ファックスをする	須崎市	18.3	12.7	17.2	16.9	34.9	100.0
	首都圏A区	27.3	11.0	13.4	10.6	37.7	100.0
	首都圏B区	26.7	10.3	14.2	12.0	36.8	100.0
別居の家族・親戚と会ったり一緒に出かける	須崎市	11.0	11.1	14.2	21.9	41.7	100.0
	首都圏A区	5.6	6.7	12.9	23.3	51.5	100.0
	首都圏B区	4.0	7.3	12.7	20.8	55.2	100.0
別居の家族・親戚と電話やメール、ファックスをする	須崎市	16.4	17.2	16.4	18.4	31.7	100.0
	首都圏A区	17.3	13.6	19.4	20.4	29.3	100.0
	首都圏B区	17.6	12.2	19.7	22.5	27.9	100.0

図表 3-2 社会関係資本—グループ参加の頻度 除く無回答 (%)

	週に1回以上			月に1~3回			年に数回			参加していない		
	須坂市	首都圏A区	首都圏B区	須坂市	首都圏A区	首都圏B区	須坂市	首都圏A区	首都圏B区	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
65~79歳												
自治会・町会	3.2	2.5	0.9	12.9	10.7	8.5	37.3	23.3	24.4	46.6	63.5	66.3
趣味・学習・教養のグループやサークル	12.2	13.6	15.3	22.4	16.8	19.2	9.3	8.7	6.3	56.2	61.0	59.2
スポーツ関係のグループ・クラブ	14.1	21.0	16.8	13.6	9.1	10.6	8.7	3.6	4.0	63.6	66.1	68.6
ボランティア・市民活動団体・NPO	2.7	42.0	3.2	7.7	5.7	7.0	10.8	6.9	6.7	78.8	83.2	83.1
育児サークル	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4	0.3	1.0	0.5	0.9	98.7	99.1	98.8
子ども支援関係の組織	0.4	0.9	0.7	1.6	1.6	0.8	5.3	2.5	1.8	92.7	95.0	96.6
老人会・老人(高齢者)クラブ	0.7	1.6	1.2	5.3	3.4	3.0	12.4	5.4	5.2	81.6	89.5	90.5
同窓会や退職者の会(OB・OG会)	0.1	0.4	0.5	3.3	3.2	3.0	37.7	38.6	38.8	58.9	57.8	57.7
業界・同業者団体	0.7	2.2	1.7	4.2	3.9	3.8	16.7	12.2	11.2	78.3	81.8	83.2
その他	2.3	4.8	5.4	7.9	5.0	6.9	6.1	8.0	6.5	83.7	82.2	81.3
50~64歳												
自治会・町会	1.4	0.2	0.3	13.7	6.5	4.7	45.8	19.2	24.1	39.2	74.2	70.9
趣味・学習・教養のグループやサークル	5.7	6.6	8.2	10.9	12.0	15	10.2	8.9	8.6	73.1	72.5	68.2
スポーツ関係のグループ・クラブ	9.4	14.1	13.3	9.0	9.6	9.6	7.7	6.1	4.7	73.9	70.2	72.4
ボランティア・市民活動団体・NPO	1.6	1.7	2.2	4.2	3.3	2.9	9.2	7.2	5.6	85.1	87.8	89.2
育児サークル	0.0	0.0	0.0	0.4	0.7	0.2	1.4	0.4	0.6	98.2	98.9	99.2
子ども支援関係の組織	1.2	0.4	0.2	1.9	2.6	2.4	7.5	5.0	5.6	89.4	92.1	91.8
老人会・老人(高齢者)クラブ	0.0	0.0	0.0	0.2	0.6	0.2	2.4	0.7	0.8	97.4	98.7	99.0
同窓会や退職者の会(OB・OG会)	0.0	0.0	0.0	0.7	0.9	1.1	23.8	29.2	27.8	75.5	69.9	71.1
業界・同業者団体	1.2	0.4	1.3	6.4	5.2	6.3	18.6	23.5	15.0	73.9	70.9	77.4
その他	1.5	2.0	0.4	3.7	2.4	3.5	5.0	4.0	3.7	89.9	91.6	92.5
25~49歳												
自治会・町会	0.2	0.1	0.1	7.9	1.2	2.2	39.7	13.5	14.0	52.2	85.2	83.7
趣味・学習・教養のグループやサークル	5.5	4.9	5.7	8.3	10.3	9.1	10.4	12.2	10.1	75.9	72.6	75.1
スポーツ関係のグループ・クラブ	8.4	6.3	6.4	6.6	8.4	8.1	8.1	7.1	7.6	76.9	78.1	77.9
ボランティア・市民活動団体・NPO	0.8	0.9	1.3	1.7	1.4	1.5	6.4	4.5	4.6	91.2	93.2	92.6
育児サークル	0.2	1.0	0.5	2.2	2.3	1.7	4.4	2.7	2.8	93.3	93.9	95.0
子ども支援関係の組織	3.9	2.3	0.9	10.2	3.9	3.5	22.3	13.7	11.5	63.6	80.2	84.1
老人会・老人(高齢者)クラブ	0.2	0.0	0.1	0.0	0.0	0	0.3	0.3	0.5	99.5	99.7	99.4
同窓会や退職者の会(OB・OG会)	0.0	0.1	0.0	0.5	0.3	0.5	11.9	16.0	15.0	87.6	83.6	84.6
業界・同業者団体	0.6	0.5	1.3	4.0	5.6	3.7	17.8	13.2	16.2	77.5	80.7	78.8
その他	1.3	1.1	0.7	1.5	2.0	1.1	2.8	1.2	1.7	94.5	95.8	96.6

図表 3-3 社会関係資本—同じような人につきあうか・異なる人につきあうか
「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」の比率の合計 除く無回答 (%)

65～79歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
自分と背景が似ている人とのつきあいが多い	36.4	39.1	37.9
自分と背景が異なる人とのつきあいが多い	12.3	17.7	12.3
50～64歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
自分と背景が似ている人とのつきあいが多い	30.5	35.1	37.4
自分と背景が異なる人とのつきあいが多い	13.6	16.1	13.6
25～49歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
自分と背景が似ている人とのつきあいが多い	37.2	53.2	45.8
自分と背景が異なる人とのつきあいが多い	16.5	16.3	18.5

回答をまとめたものだが、65歳以上、64歳以下ともに「自治会・町会」活動について「参加していない」の比率が、須坂市は首都圏2区と比較して大幅に低い。年齢階層別に不参加率の詳細をみると、25～49歳では、首都圏2区が8割以上であるのに対して須坂市では52.2%であり、さらに50～64歳では、首都圏2区が7割以上であるのに対して須坂市では39.2%である。65～79歳でも、首都圏2区が6割以上であるのに対して須坂市では46.6%である。換言すれば、「自治会・町会」への参加率は、首都圏2区よりも須坂市のほうが圧倒的に高い。このほか、49歳以下では「子ども支援関係の組織」、具体的にはPTA、子ども育成会などへの参加率も、須坂市のほうが首都圏2区よりも高い。不参加率でみると、25～49歳では首都圏2区が8割以上であるのに対して、須坂市では63.6%である。自治会、町会、PTAや子ども会などを地縁型組織と呼ぶが、須坂市では明らかに地縁型組織への参加率が首都圏2区よりも高い。

また、図表 3-3 は、自分と背景が似ている人とのつきあい、背景が異なる人とのつきあいについて尋ねている。これは、社会関係資本論では背景が似ている人同士のネットワークを結束型（ボンディングな）社会関係資本、背景が異なる人とのネットワークを橋渡し型（ブリッジングな）社会関係資本と分類していることに対応した問である。一般的

図表 3-4 認知的社会関係資本 含む無回答 (%)

	須坂市					首都圏A区					首都圏B区				
	そう思う	どちらとも いえない	そう思わない	そう思う	どちらとも いえない	そう思わない	そう思う	どちらとも いえない	そう思わない	そう思う	どちらとも いえない	そう思わない	そう思う	どちらとも いえない	そう思わない
65～79歳															
一般的に人は信頼できる	50.1	39.7	7.9	47.6	41.0	7.9	47.6	41.0	7.9	47.9	39.6	47.9	39.6	9.3	
多くの場合、人は他人の役に立とうとする	48.8	39.2	9.4	51.9	34.9	9.4	51.9	34.9	9.4	49.4	38.9	49.4	38.9	9.1	
近隣の人は信頼できる	55.4	33.5	8.4	47.9	40.1	8.4	47.9	40.1	8.4	49.2	39.4	49.2	39.4	8.8	
多くの場合、近隣の人は他人の役に立とうとする	42.5	41.1	13.8	38.7	43.9	13.1	38.7	43.9	13.1	37.5	47.1	37.5	47.1	12.8	
あなたは一般的に言って、以下の年代の人たちを信頼していますか															
子どもや10代の若者	42.7	44.4	8.3	35.9	48.2	11.1	35.9	48.2	11.1	39.6	47.8	39.6	47.8	9.3	
20～40代くらいの人	41.1	46.0	7.8	36.9	48.2	10.5	36.9	48.2	10.5	39.1	48.9	39.1	48.9	8.3	
50～60代くらいの人	51.9	37.9	5.6	46.7	41.8	7.1	46.7	41.8	7.1	48.1	42.6	48.1	42.6	6.1	
70代かそれより高齢の人	49.4	39.0	7.3	47.0	41.1	7.9	47.0	41.1	7.9	48.4	40.7	48.4	40.7	8.0	
50～64歳															
一般的に人は信頼できる	48.4	7.2	11.0	47.4	39.4	11.8	47.4	39.4	11.8	50.3	41.3	50.3	41.3	7.0	
多くの場合、人は他人の役に立とうとする	47.2	9.0	13.3	46.5	40.7	12.0	46.5	40.7	12.0	48.1	42.5	48.1	42.5	8.6	
近隣の人は信頼できる	50.9	6.2	10.0	42.8	45.0	11.1	42.8	45.0	11.1	44.3	45.9	44.3	45.9	8.6	
多くの場合、近隣の人は他人の役に立とうとする	39.6	10.0	15.7	30.7	53.2	15.1	30.7	53.2	15.1	32.9	51.9	32.9	51.9	14.3	
あなたは一般的に言って、以下の年代の人たちを信頼していますか															
子どもや10代の若者	35.8	29.6	14.6	33.9	48.3	17.1	33.9	48.3	17.1	34.6	51.3	34.6	51.3	13.0	
20～40代くらいの人	42.2	36.3	10.0	35.9	50.6	12.7	35.9	50.6	12.7	37.5	48.7	37.5	48.7	12.9	
50～60代くらいの人	56.1	48.0	6.5	47.0	43.7	8.5	47.0	43.7	8.5	49.4	41.9	49.4	41.9	7.8	
70代かそれより高齢の人	48.2	41.3	9.8	43.0	43.2	12.9	43.0	43.2	12.9	43.7	44.8	43.7	44.8	10.6	
25～49歳															
一般的に人は信頼できる	44.9	9.2	16.2	49.7	36.8	13.1	49.7	36.8	13.1	46.9	35.4	46.9	35.4	17.0	
多くの場合、人は他人の役に立とうとする	45.0	12.1	15.8	54.2	31.6	13.5	54.2	31.6	13.5	49.0	35.5	49.0	35.5	14.7	
近隣の人は信頼できる	43.8	9.8	14.4	38.0	44.7	16.7	38.0	44.7	16.7	37.0	45.1	37.0	45.1	17.0	
多くの場合、近隣の人は他人の役に立とうとする	36.8	13.5	18.8	32.0	47.5	19.9	32.0	47.5	19.9	30.6	47.6	30.6	47.6	20.9	
あなたは一般的に言って、以下の年代の人たちを信頼していますか															
子どもや10代の若者	41.5	30.0	16.4	34.0	48.0	17.3	34.0	48.0	17.3	37.4	42.2	37.4	42.2	19.7	
20～40代くらいの人	49.2	41.3	9.8	42.4	46.6	10.5	42.4	46.6	10.5	42.3	43.0	42.3	43.0	14.0	
50～60代くらいの人	51.5	42.0	11.8	44.5	42.1	12.8	44.5	42.1	12.8	43.3	40.5	43.3	40.5	15.4	
70代かそれより高齢の人	45.9	36.6	15.5	40.4	43.9	15.1	40.4	43.9	15.1	42.1	39.7	42.1	39.7	17.6	

には、大都市では地縁型組織への参加率が低く橋渡し型が高く、地方では地縁型組織への参加率が高く結束型が高いとみられている。一般に地方都市のほうが「自治会・町会」と「子ども支援関係の組織」などの地縁型への参加率が高く、近隣とのつきあいも厚いが、須坂市もそのとおりの状況がみてとれる。しかし、図表 3-3 に示す 3 地区の比較では、65 歳以上はどちらの分類についても首都圏 2 区が須坂市の値と同じか若干上回っており、64 歳以下でも同様の傾向がみられるが、とくに 25 歳～49 歳層で結束型のつきあいの比率が首都圏 2 区のほうが須坂市の値を大きく上回っている。これは通説と相容れない結果となっており、より複雑な要因があることをうかがわせるもので、より詳細な検討が必要であろう。

図表 3-4 は、社会関係資本のもう一つの構成要素である、信頼・規範などの認知的社会関係資本に関するものである。65 歳以上でも 64 歳以下でも、近隣の人に対する信頼が、須坂市は首都圏 2 区に比して高いが、とくに 64 歳以下は首都圏 2 区を大幅に上回っている。64 歳以下では「近隣の人には信頼できる」と「多くの場合、近隣の人には他人の役に立とうとする」に同意する回答者の比率が、須坂市ではそれぞれ、首都圏 2 区の比率を上回っており、特に 25～49 歳では須坂市が大きく上回っている。加えて図表 3-4 の下段では、4 年齢層に対する信頼を尋ねており、64 歳以下の須坂市の信頼が対象となる年齢階層すべてにおいて首都圏 2 区を上回っている。須坂市では近隣の人に対する信頼が高い。

3.3 世代間継承・交流

図表 3-5 は、25～49 歳、50～64 歳、65～79 歳の 3 年齢階層の世代間・世代内の会話の有無についての回答をまとめたものである。一般に、「ある」は同世代間の比率が最も高い。地区別には「全くない」とする比率が須坂市は首都圏 2 区のそれを下回って、何らかの会話の機会を持っている比率が高い。とくに 25～49 歳の若年壮年層は子ど

図表 3-5 世代交流—会話 含む無回答 (%)

	須坂市				首都圏 A 区				首都圏 B 区			
	ある	あまりない	全くない		ある	あまりない	全くない		ある	あまりない	全くない	
65 歳～79 歳												
子どもや 10 代の若者	25.7	27.8	37.3		27.8	19.6	39.3		26.6	21.2	40.5	
20～40 代くらいの人	35.0	33.4	23.3		34.4	22.4	28.8		38.2	22.4	28.7	
50～60 代くらいの人	70.8	14.4	9.7		69.5	11.5	11.5		67.0	11.2	15.4	
70 代かそれより高齢の人	70.8	16.9	8.8		70.0	12.8	12.5		63.8	14.3	15.9	
50 歳～64 歳												
子どもや 10 代の若者	16.7	31.3	49.1		18.5	22.1	54.3		19.1	22.1	54.4	
20～40 代くらいの人	36.7	32.7	28.2		34.5	26.1	35.9		35.1	26.3	34.3	
50～60 代くらいの人	65.4	20.3	12.9		59.0	16.9	21.6		56.7	20.3	21.9	
70 代かそれより高齢の人	50.1	28.7	18.9		43.6	21.1	31.8		42.5	23.8	30.8	
25 歳～49 歳												
子どもや 10 代の若者	38.3	21.3	39.2		32.3	16.6	49.6		32.1	16.7	50.1	
20～40 代くらいの人	55.1	18.7	25.6		52.4	15.8	30.8		49.6	17.1	32.6	
50～60 代くらいの人	46.2	25.9	26.2		37.5	23.9	37.4		37.4	23.3	38.4	
70 代かそれより高齢の人	30.3	30.9	37.4		23.7	23.7	51.5		20.2	23.2	55.2	

もから70歳以上まで、会話があるとする回答者の比率が首都圏2区を上回り、「全くない」とする比率が首都圏2区を大幅に下回っている。須坂市では、25～49歳層が、年上の人々と会話する機会が、首都圏2区と比較して明らかに多い。

図表3-6は、25～49歳、50～64歳、65～79歳の3年齢階層の世代間・世代内の手助けと心配事・悩み事相談の提供の有無についての回答をまとめたものである。会話同様、3地区いずれでも50～64歳の手助けを除いて、同世代に対しての相談・手助けの提供の比率が最も高い。全般に、「ある」とする比率は3地区間で顕著な差はないが、「会話」と同様、25～49歳の若年壮年層で手助けや相談をすることが「全くない」者の比率が須坂市では首都圏2区を下回って、何らかの手助け・相談の機会を同世代だけではなく年長者に対しても提供している比率が高い。須坂市では、25～49歳層が、年上の人々と会話する機会と同様、年長者への手助けや相談経験がある者の比率が、首都圏2区と比較して明らかに多い。ただし、「ある」とする比率が顕著に高いわけではないので、やむを得ず相談や手助けを提供したという解釈も可能かもしれない。

図表3-7は、25～49歳、50～64歳、65～79歳の3年齢階層の世代間・世代内の手助けと心配事・悩み事相談をしてもらう（受領）の有無についての回答をまとめたものである。手助けと相談の提供と同様、受領でも65歳～79歳が50歳～64歳から手助けをしてもらう場合を除き、3地区いずれでも同世代からの相談・手助けを受ける比率が最も高い。全般に、「ある」とする比率は須坂市での中年層と高年層からの受領の比率が首都圏2区と比較して総じて高い。さらに、手助けと相談の提供と同様、25～49歳の若年壮年層で手助けや相談をしてもらったことが「全くない」者の比率が須坂市では首都圏2区を下回って、何らかの手助け・相談の機会を同世代だけではなく年長者からも提供

図表 3-6 世代交流—手助けをする・心配事や悩み事を聞く (%)

	須坂市			首都圏A区			首都圏B区		
	ある	あまりない	全くない	ある	あまりない	全くない	ある	あまりない	全くない
65歳～79歳									
手助けをする									
20～40代くらいの人	11.8	30.4	51.1	13.7	27.2	50.9	7.5	33.2	52.2
50～60代くらいの人	25.8	32.6	34.5	27.0	26.6	37.4	23.6	26.6	42.5
70代かそれより高齢の人	45.2	26.1	26.2	41.8	23.9	29.2	36.5	23.1	35.7
心配事や悩み事を聞く									
20～40代くらいの人	9.0	27.2	57.7	10.8	25.0	56.2	8.8	25.0	58.0
50～60代くらいの人	25.4	30.5	37.5	28.2	23.4	40.3	23.4	25.8	44.9
70代かそれより高齢の人	37.2	28.4	32.6	37.6	25.0	33.7	32.4	22.6	41.2
50歳～64歳									
手助けをする									
20～40代くらいの人	8.8	35.1	54.4	10.7	23.8	62.4	10.5	29.2	58.4
50～60代くらいの人	19.3	40.1	38.9	19.1	27.6	50.3	19.5	29.0	49.7
70代かそれより高齢の人	27.9	36.1	34.9	29.8	23.0	45.0	26.2	25.7	46.7
心配事や悩み事を聞く									
20～40代くらいの人	7.7	26.3	63.7	11.4	18.7	67.2	12.7	21.0	64.9
50～60代くらいの人	18.8	29.3	50.3	22.0	21.1	54.8	22.2	20.8	55.9
70代かそれより高齢の人	14.3	30.8	53.4	17.6	21.2	59.3	16.0	21.7	61.1
25歳～49歳									
手助けをする									
20～40代くらいの人	18.4	31.4	49.9	16.7	26.4	56.1	15.6	24.4	59.3
50～60代くらいの人	16.5	31.9	50.8	11.8	28.2	59.1	10.9	25.6	62.4
70代かそれより高齢の人	16.5	30.5	52.4	16.2	24.1	58.9	12.4	23.7	63.0
心配事や悩み事を聞く									
20～40代くらいの人	21.1	21.7	56.2	24.6	15.7	59.3	21.6	15.9	61.8
50～60代くらいの人	7.4	25.7	65.8	5.6	18.5	74.8	6.0	16.8	76.3
70代かそれより高齢の人	5.2	24.2	69.7	6.0	15.5	77.8	4.9	16.1	78.2

図表 3-7 世代交流—手助けをしてもらう・心配事や悩み事を聞いてもらう (%)

65歳～79歳	須坂市			首都圏A区			首都圏B区		
	ある	あまりない	全くない	ある	あまりない	全くない	ある	あまりない	全くない
手助けをしてもらう									
20～40代くらいの人	8.1	24.7	62.0	8.1	20.2	66.4	5.9	20.0	69.7
50～60代くらいの人	17.3	27.9	49.4	12.0	26.8	55.5	11.1	23.9	59.6
70代かそれより高齢の人	15.8	30.1	50.3	11.3	24.5	59.0	10.4	22.1	63.1
心配事や悩み事を聞いてもらう									
20～40代くらいの人	3.4	21.0	70.3	3.0	20.4	70.0	3.5	16.8	74.4
50～60代くらいの人	15.9	28.0	49.9	11.0	26.3	56.5	15.1	20.2	60.1
70代かそれより高齢の人	19.5	30.1	47.9	19.6	23.6	53.0	15.1	23.1	57.5
50歳～64歳									
須坂市									
ある	あまりない	全くない	ある	あまりない	全くない	ある	あまりない	全くない	
手助けをしてもらう									
20～40代くらいの人	7.2	26.5	64.9	6.9	16.9	74.0	7.6	14.0	77.0
50～60代くらいの人	20.3	28.1	50.8	12.7	21.4	64.2	17.5	18.4	63.3
70代かそれより高齢の人	11.2	28.7	58.9	6.7	19.4	71.7	7.8	16.5	74.3
心配事や悩み事を聞いてもらう									
20～40代くらいの人	6.2	21.5	70.7	6.0	16.3	75.1	6.8	18.9	72.9
50～60代くらいの人	20.0	24.1	54.9	18.1	18.7	61.3	14.0	20.0	64.9
70代かそれより高齢の人	8.1	25.6	65.1	8.2	17.2	72.2	8.1	18.3	72.2
25歳～49歳									
須坂市									
ある	あまりない	全くない	ある	あまりない	全くない	ある	あまりない	全くない	
手助けをしてもらう									
20～40代くらいの人	20.1	29.9	49.3	21.6	18.2	59.7	21.3	13.8	64.1
50～60代くらいの人	16.2	29.7	53.6	12.1	18.6	68.4	7.9	14.8	76.6
70代かそれより高齢の人	6.3	30.3	62.6	7.7	19.0	72.7	3.9	13.9	81.4
心配事や悩み事を聞いてもらう									
20～40代くらいの人	21.4	19.9	58.2	21.3	14.8	63.3	18.3	17.7	63.3
50～60代くらいの人	11.3	24.2	64.0	7.6	15.4	75.7	11.4	18.3	69.5
70代かそれより高齢の人	4.4	22.1	72.7	4.6	14.2	80.6	5.3	15.9	77.9

されている比率が高い。須坂市では、25～49歳層が、年上の人々と会話する機会や手助け・相談の提供と同様、年長者からの手助けをしてもらったり、相談に乗ってもらった経験がある者の比率が、首都圏2区と比較して明らかに多い。ただし、ここでも「ある」とする比率が顕著に高いわけではないので、やむを得ず相談や手助けを受けたという解釈も可能かもしれない。

図表 3-8 は世代性 (Generativity) に関する問の回答である。本稿で用いられている世代性の問いは、米国ジョンスホプキンス大学の Hopkins Generativity Index (27項目) とその他の先行指標を参考に、東京都健康長寿医療センター研究所の社会参加と地域保健研究チームと首都大学東京都市システム科学専攻域が開発したもので、須坂市でも筆者が開発者の許可を得て利用したものである (大場ら、2013)。

図表 3-8 に示すように、本稿での3調査は世代間継承に関連する考えを、「人生についての考え」、「人生における「行動」について」および「人生について現在どのように考えるか」の3つの側面から尋ねた設問結果を示している。これらの設問に対して肯定的な者ほど地域における社会関係資本を含んだ価値観の伝承・継承に前向きであると仮定した設問である。

須坂市の65歳以上階層は、首都圏2区に比して、「考え」と「現在どのように感じているか」について肯定的であり、「行動」については控えめである。とくに「行動」のなかでも「他の人に影響を与えるようなこと」については控えめである。

一方、須坂市の64歳以下は総じて控えめであり、「考え」「行動」ともに首都圏2区に比べて肯定的な回答の比率が低い。唯一「地域に役立っている気がする」の比率が高い。また、須坂市は3年齢階層すべてで「地域に役立っている気がする」回答者の比率が首都圏2区に比して大幅に高い。換言すれば、須坂市では住民の地域への貢献感がきわめて高い。

図表 3-8 世代間継承の考えについて 含む無回答 (%)

65～79歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
	そう思う/する	そう思う/する	そう思う/する
人生についての考え			
(1) 新しい事や、新しい方法をつくりだしたい	64.4	65.1	66.3
(2) 自分の経験を他の人と分かち合いたい	62.1	59.9	59.6
(3) 若い人たちの良き助言者になりたい	62.2	60.7	59.5
(4) 将来にわたって他の人のためになるような何かをしたい	69.8	68.5	67.6
あなたの人生における「行動」について			
(1) 自分の人生について若い人たちに語ることで、彼らを支援すること	29.9	32.0	30.8
(2) 自分自身の経験を若い人たちに語ること	37.6	38.3	37.7
(3) 若い人たちにアドバイスをすること	37.4	37.4	37.8
(4) 他の人に影響を与えるようなこと	19.0	24.1	27.1
あなたの人生について現在どのように感じているか			
(1) 地域に役立っている気がする	41.1	32.7	26.0
(2) 功績として残せることをしている気がする	22.0	22.3	15.1
(3) 世の中に恩返しをしている気がする	28.2	27.3	22.6
(4) 他の人々の人生に影響を与えている気がする	21.1	22.3	19.9
50～64歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
	そう思う/する	そう思う/する	そう思う/する
人生についての考え			
(1) 新しい事や、新しい方法をつくりだしたい	67.0	71.1	74.3
(2) 自分の経験を他の人と分かち合いたい	55.1	60.1	63.8
(3) 若い人たちの良き助言者になりたい	57.3	57.9	63.3
(4) 将来にわたって他の人のためになるような何かをしたい	69.7	76.0	79.2
あなたの人生における「行動」について			
(1) 自分の人生について若い人たちに語ることで、彼らを支援すること	31.5	33.4	33.8
(2) 自分自身の経験を若い人たちに語ること	36.1	38.7	39.7
(3) 若い人たちにアドバイスをすること	39.6	44.8	46.3
(4) 他の人に影響を与えるようなこと	22.5	28.3	30.6
あなたの人生について現在どのように感じているか			
(1) 地域に役立っている気がする	32.9	20.1	20.6
(2) 功績として残せることをしている気がする	15.5	13.6	11.7
(3) 世の中に恩返しをしている気がする	21.3	24.7	20.6
(4) 他の人々の人生に影響を与えている気がする	18.2	17.8	17.6
25～49歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
	そう思う/する	そう思う/する	そう思う/する
人生についての考え			
(1) 新しい事や、新しい方法をつくりだしたい	72.3	76.9	76.7
(2) 自分の経験を他の人と分かち合いたい	60.9	67.3	67.8
(3) 若い人たちの良き助言者になりたい	51.1	60.5	61.4
(4) 将来にわたって他の人のためになるような何かをしたい	73.5	80.4	78.6
あなたの人生における「行動」について			
(1) 自分の人生について若い人たちに語ることで、彼らを支援すること	26.8	24.4	30.1
(2) 自分自身の経験を若い人たちに語ること	32.2	34.9	39.9
(3) 若い人たちにアドバイスをすること	39.7	41.7	44.7
(4) 他の人に影響を与えるようなこと	23.3	31.7	33.2
あなたの人生について現在どのように感じているか			
(1) 地域に役立っている気がする	26.6	14.0	13.3
(2) 功績として残せることをしている気がする	13.2	13.5	12.3
(3) 世の中に恩返しをしている気がする	18.5	24.1	20.2
(4) 他の人々の人生に影響を与えている気がする	19.4	25.8	22.4

図表 3-9 子どもや子育て中の人に対して、どのようなことをするか (%)

65～79歳	須崎市	首都圏A区	首都圏B区
子どもの安全・健全な成長（設問1～3の合計点）	4.5	4.3	3.6
親への手段的サポート（設問4と7の合計点）	0.8	0.8	0.9
親への情緒的サポート（設問5と6の合計点）	1.6	1.6	1.2
総合点（平均点）	6.9	6.6	5.3
50～64歳	須崎市	首都圏A区	首都圏B区
子どもの安全・健全な成長（設問1～3の合計点）	3.8	3.4	3.6
親への手段的サポート（設問4と7の合計点）	0.7	0.7	0.9
親への情緒的サポート（設問5と6の合計点）	1.3	1.3	1.2
総合点（平均点）	5.8	5.6	5.6
25～49歳	須崎市	首都圏A区	首都圏B区
子どもの安全・健全な成長（設問1～3の合計点）	3.9	3.0	3.0
親への手段的サポート（設問4と7の合計点）	1.2	1.0	1.0
親への情緒的サポート（設問5と6の合計点）	1.9	1.5	1.4
総合点（平均点）	7.0	5.4	5.3

子育て支援は孫親子の3世代間でなされることも多く、世代をつなぐという観点からはきわめて重要である。子育て支援が手薄な地域は、地域との一体感が希薄であり、社会関係資本の世代間継承にも消極的かもしれない。逆に、地域の子育て支援が手厚ければ、社会関係資本の世代間継承にも前向きな住民が多いかもしれない。

本稿で用いている子育て支援尺度⁽⁶⁾は、7つの設問ごとに「よくある」「ときどきある」「あまりない」「全くない」の4件法での回答に3～0点を割り当て、総合点は7項目の合計で0～21点、また下位尺度として「子どもの安全・健全な成長」（0～9点）、「親への手段的サポート」と「親への情緒的サポート」（各0～6点）として、点数が高いほど支援が充実していることを示している。

この尺度は「子どもの安全・健全な成長（を促すための支援）」「親への手段的サポート」「親への情緒的サポート」の3つの概念を測定するもので、小林ら（2018）によれば、地域住民によるインフォーマルな子育て支援の状況を客観的に評価するツールとして用いられるという。須崎市調査と首都圏2区の調査では、これら3つの概念について7つの設問を設け、上記3概念に基づく合計点と総合点により、地域住民によるインフォーマルな子育て支援のいわば可視化を試みており、図

表 3-9 に示されるように、須坂市は 65～79 歳で「親への手段的サポート」を除き、いずれの尺度でも総合点でも首都圏 2 区を上回っており、とくに 25～49 歳の評価は首都圏 2 区に比して圧倒的に高い。

3.4 健康・身体機能・生活面の支援などについて

主観的健康 (SRH) と WHO-5：身体と心の健康

本調査では、身体的健康について主観的健康 (self-rated health、SRH) を尋ねている。これは「あなたはふだんご自分で健康だと思いますか。」という問いに対して、「とても健康だ」「まあ健康な方だ」「あまり健康でない」「健康ではない」の 4 つの選択肢から一つを選んでもらう、というきわめて単純なものであるが、個人の身体的健康の予測指標として有効であることが実証されている。図表 3-10 は、「とても健康だ」と「まあ健康な方だ」とする比率は、65 歳以上と 50～64 歳の 2 階層では 3 地区ほぼ同レベルであるが、25～49 歳では健康とした比率が、須坂市は首都圏 2 区と比較すると若干低い。この傾向は WHO-5 (精神的健康) ではとくに顕著である。

WHO-5 では、最近 2 週間、以下の 5 項目について(1)明るく、楽しい気分で過ごした、(2)落ち着いた、リラックスした気分で過ごした、(3)意欲的で、活動的に過ごした、(4)ぐっすりと休め、気持ちよくめざめた、(5)日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった、の 5 問について「全くない」を 0、「いつも」を 5 として 6 件法で回答し、合計点が 12 以下の場合、精神的健康状態が悪いとされている⁽⁷⁾。この比率は 65 歳以上では、SRH 同様、3 地区ほぼ同レベルであるが、3 地区いずれも、合計点 12 以下の比率が 64 歳以下のほうが 65 歳以上よりも高く、なかでも須坂市は 4 割以上ととくに高い。また精神的な健康に関しては、須坂市が高齢者層との若年壮年層との乖離が最も大きい⁽⁸⁾。

図表 3-12 は、日常生活における活動能力 (ADL) について具体的に 13 の項目についてできるかどうかを尋ねたものを手段的、知的、社会

図表 3-10 主観的健康 (%)

65～79歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
とても健康	8.6	9.9	11.8
まあ健康	66.5	66.9	67.9
あまり健康でない	18.5	16.1	12.8
健康ではない	6.5	7.6	7.5
合計	100.0	100.0	100.0
50～64歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
とても健康	9.5	11.5	11.0
まあ健康	71.1	67.2	72.5
あまり健康でない	16.0	15.8	12.4
健康ではない	3.4	5.5	4.2
合計		100.0	
25～49歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
とても健康	15.4	21.3	21.0
まあ健康	66.9	66.5	67.2
あまり健康でない	13.4	9.9	9.8
健康ではない	4.3	2.3	2.0
合計	100.0	100.0	100.0

図表 3-11 WHO-5の合計点 (%)

65～79歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
合計点12以下	28.3	29.1	26.3
合計点13以上	71.7	70.9	73.7
50～64歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
合計点12以下	41.5	36.3	36.0
合計点13以上	58.5	63.7	64.0
25～49歳	須坂市	首都圏A区	首都圏B区
合計点12以下	44.7	34.0	38.7
合計点13以上	55.3	66.0	61.3

図表 3-12 IADL 「できる」 の比率と係数

65～79歳		須坂市	首都圏A区	首都圏B区
手段的 ADL	バスや電車を使って一人で外出	94.3	97.6	95.8
	日用品の買い物	96.7	98.1	96.9
	自分で食事の用意	91.7	95.4	94.4
	請求書の支払い	96.4	97.8	97.6
	銀行預金、郵便貯金の出し入れ	94.7	95.5	96.8
「できる」の件数の平均点(1)		4.7	4.8	4.8
知的 ADL	年金などの書類を書く	93.9	95.9	96.4
	新聞を読んでいる	92.2	84.3	86.0
	本や雑誌を読んでいる	85.2	84.9	87.4
	健康についての記事や番組に関心がある	92.6	91.8	93.5
「できる」の件数の平均点(2)		3.6	3.6	3.6
社会的 ADL	友達の家を訪ねることがある	69.2	57.0	53.4
	家族や友達の相談にのることがある	82.8	79.3	78.6
	病人を見舞うことができる	95.7	94.7	92.6
	若い人に自分から話しかけることがある	77.9	68.4	68.8
「できる」の件数の平均点(3)		3.3	3.0	2.9
IADL 得点 13 項目のうち 「できる」の件数の一人当たり合計		11.6	11.5	11.4

的の3つにまとめてそれぞれのスコアを示した老研式⁽⁹⁾活動能力指標である。手段的 ADL と知的 ADL については、知的 ADL の「新聞を読んでいる」で須坂市が首都圏2区よりも高いほかは、3地区間で大きな違いはないが、社会的 ADL については須坂市が4項目いずれでも首都圏2区を大幅に上回っているため、総合得点でも須坂市が最も高い。社会的 ADL のなかでは、「友達の家を訪ねることがある」と「若い人に自分から話しかけることがある」が須坂市で高い。

4. 調査比較から得られた知見のまとめと今後の課題

以上、長野県須坂市の世代間交流・継承、社会関係資本、健康状態などについて、首都圏2地区との比較を行った。

社会関係資本の構成要素である人々とのつきあいについては、須坂市の場合、首都圏2区に比して、対面による親族・友人・知人とのつきあいが密である。また「自治会・町会」への参加率は、須坂市のほうが首都圏2区より圧倒的に高い。このほか、64歳以下では「子ども支援関係の組織」、具体的にはPTA、子ども育成会、などへの参加率が須坂市のほうが首都圏2区よりも高い。自治会、町会、PTA、子ども会などの地縁型組織への参加率が首都圏2区よりも大幅に高い。

社会関係資本のもう一つの構成要素である信頼については、65歳以上でも64歳以下でも、近隣の人に対する信頼が、須坂市は首都圏2区に比して高いが、とくに64歳以下で首都圏2区を大幅に上回っている。加えて64歳以下では「近隣の人には信頼できる」だけではなく「多くの場合、近隣の人には他人の役に立とうとする」に同意する回答者の比率も、須坂市が首都圏2区を大きく上回っている。さらに、対象年齢層別にみた信頼でも、64歳以下の須坂市の信頼が対象年齢階層すべてにおいて首都圏2区を上回っている。要するに須坂市では、年齢にかかわらず近隣の人々に対する信頼が高い。須坂市の社会関係資本は、近隣や地縁関係の組織参加を通じて厚い信頼や互酬性が醸成されているといえる。

一方、世代間継承に関連する考えについて、須坂市は3年齢階層ともに「地域に役立っている気がする」回答者の比率が、首都圏2区に比して大幅に高い。換言すれば、須坂市では住民の地域への貢献感がきわめて高い。また地域における相互扶助にも関連している子育て支援尺度は、「子どもの安全・健全な成長（を促すための支援）」「親への情緒的サポート」（65歳以上を除く）「親への手段的サポート」の3つの概念いずれにおいても、須坂市は首都圏2区よりも地域の支援度が高い。

人々の健康に関しては、日常生活における活動能力（ADL）のスコアは、手段的ADLと知的ADLについては3地区間で大きな違いはないが、社会的ADLについては須坂市が4項目いずれでも首都圏2区を大幅に上回っているため、総合得点でも須坂市が最も高い。社会的ADL

のなかでは、「友達の家を訪ねることがある」と「若い人に自分から話しかけることがある」が須坂市で高い。

また、身体的健康の予測変数として多用されている主観的健康 (self-rated health、SRH) は、健康の比率が、65 歳以上と 50～64 歳では 3 地区ほぼ同レベルであるが、25～49 歳では健康とした回答比率が須坂市は首都圏 2 区と比較すると若干低い。この傾向は WHO-5 (精神的健康) ではとくに顕著である。WHO-5 は、65 歳以上では、SRH 同様、3 地区ほぼ同レベルであるが、64 歳以下では、3 地区いずれも合計点 12 以下 (精神的健康状態が良好ではない) の比率が高く、須坂市は 4 割以上ととくに高く、かつ 65 歳以上の水準を上回っている。さらに精神的な健康に関しては、高齢者層との若年壮年層との乖離 (若年壮年層のほうが高齢者層よりも悪い状態) が、3 地区のなかでは須坂市が最も大きい。

須坂市では明らかに住民同士の密な社会関係資本が醸成され、世代間継承に関する意識も地域貢献を中心に高いが、その一方で若年壮年層の精神的な健康は良好ではない。単純集計の比較による解釈は、それぞれの地域の歴史的文化的な経緯、それに伴う経済社会的な相違、また調査票の質問項目間の相互の影響、さらにはサンプリングや有効回答の代表性に起因する問題など、さまざまな要因を吟味すべきで、集計値の地区間の差の要因説明は控えるべきであろう。ただ、須坂市に限ってみれば、世代間継承の対象となる密な社会関係資本が隣人たちとの間に存在し、世代間継承の重要な要素である地域貢献感も高いが、社会関係資本の継承を実現するためには、若年壮年層の精神面の負担の原因分析とそれを踏まえた改善策を検討する必要がある。

なお、本稿は予備的考察として、集計結果の比較による記述統計の検討にとどまっており、今後より詳細な多変量解析を実施する予定である。

参考

稲垣宏樹、井藤佳恵、佐久間尚子ほか (2013) 「WHO-5 精神健康状態表簡易

- 版 (S-WHO-5-J) の作成及びその信頼性・妥当性の検討」『日本公衆衛生雑誌』60 (5): 294-301.
- 稲葉陽二 (2016) 「第 I 部 学術的有効性と政策的含意」稲葉陽二、吉野諒三著『ソーシャル・キャピタルの世界』ミネルヴァ書房、1-179.
- 稲葉陽二 (2019) 「社会関係資本をどう継承するか—長野県須坂市のケースからの考察」『政経研究』55 (4) 132-172.
- 大場宏美、藤原佳典、村山陽、野中久美子ほか (2013) 「世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 generativity 尺度作成の試み」『日本世代交流学会誌』3 (1): 59-65.
- 小澤義雄. 老年期の Generativity 研究の課題. 老年社会科学 2012; 34: 46-56.
- 小林江里香、深谷太郎、原田謙ほか (2016) 「中高年者を対象とした地域の子育て支援行動尺度の開発」『日本公衆衛生雑誌』2016; 63 (3): 101-112.
- 小林江里香、野中久美子、倉岡正高、松永博子ほか (2018) 「地域の子育て支援行動尺度の多世代への適用可能性と支援行動の世代別特徴」『日本公衆衛生雑誌』2018; 65 (7): 321-333.
- 古谷野巨、柴田博、中里克治ほか (1987) 「地域老人における活動能力の測定—老研式活動能力指標の開発—」『日本公衆衛生雑誌』34: 109-114.
- 近藤克則 (編著) (2016) 『講座ケア4 ケアと健康 社会・地域・病』ミネルヴァ書房。
- 田淵恵、中川威、権藤恭之ほか (2012) 「高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」『厚生指標』59: 1-7.
- 根本裕太、倉岡正高、野中久美子、田中元基ほか (2018) 「若年壮年層と老年層における世代内／世代間交流と精神的健康状態との関連」『日本公衆衛生雑誌』2018; 65 (12): 719-729.
- 藤原佳典ほか (2003) 「自立高齢者における老研式活動能力指標得点の変動—生活機能の個別評価に向けた検討」『日本公衆衛生雑誌』50 (4): 360-367.
- 村山幸子、小林江里香、倉岡正高ほか 「ジェネラティビティの構成要因と関連要因についての探索的検討—都市部高齢者を対象とした郵送調査の結果から—」第 59 回日本老年社会科学大会、於：名古屋、734、2017.6.14-16.
- Erikson E. H., and Erikson J.M. (1982) *The Life Cycle Completed*, W.W. (= 村瀬孝雄、近藤郁夫 (訳) (2001) 『ライフサイクル、その完結』みすず書房。)
- Inaba, Y. (2013) “What’s Wrong with Social Capital? Critiques from Social Science” in Kawachi, I., S.V. Subramanian. (Eds.) *Global Perspectives on Social Capital and Health*, Springer, 323-342.
- Inaba, Y. et al. (2015) “Which part of community social capital is related to

life satisfaction and self-rated health? A multilevel analysis based on a nationwide mail survey in Japan” *Social Science and Medicine*, 142, 169-182.

McAdams DP, de St. Aubin E. (1992) “A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography” *Journal of Personality and Social Psychology*, 62 (6): 1003-1015.

McAdams DP, de St. Aubin E, Logan RL. “Generativity among young, midlife, and older adults” *Psychology and Aging*, 1993; 8 (2): 221-230.

Psychiatric Research Unit-WHO Collaborating Center in Mental Health translated by Shuichi Awata, WHO-5 精神的健康状態表 (1998年版)

https://www.psykiatri-regionh.dk/who-5/Documents/WHO5_Japanese.pdf (2019年2月27日アクセス).

謝辞

調査にご協力いただきました3自治体の皆様、調査にご回答いただいた皆様に心から御礼申し上げます。本稿は須坂市調査については文科省科学研究費補助金挑戦的研究(萌芽)(課題番号17K18592、研究代表者 小藪明生)の、首都圏2区郵送法調査についてはJST/RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン—ジェネラティビティで紡ぐ重層的な地域多世代共助システムの開発」(研究代表者 藤原佳典)の助成をいただいて実施したものです。図表の作成にあたっては、稲葉研究室の宮下淳子氏、戸川和成氏、川村夏紀氏、吉野美紅氏の皆さんにお世話になりました。また、査読の労をとっていただきました先生方にも御礼申し上げます。

- (1) 本稿は稲葉(2019)の続編である。同論考は、須坂市地区別の歴史的経緯も含めた概要、須坂市における社会関係資本の推移と全国調査の比較、須坂市における社会関係資本の継承メカニズムに関する仮説について関係者への半構造化インタビューに依拠して論じている。
- (2) たとえば、近藤克則(編著、2016)序章、第2章、第3章、第5章～第7章参照。なお、ネットワークは社会関係資本論における重要な構成要素であるが、公衆衛生の分野では社会関係資本の概念が導入される1990年代より20年以上前からソーシャルサポート研究がなされており、公衆

衛生における社会関係資本論者はネットワークを社会関係資本から外して論じる傾向がある。

- (3) たとえば稲葉ほか (2016) 参照。
- (4) これは図表 2 には記載していないが、首都圏 2 区調査は、世代間交流の実態を明らかにするため、通常では回答率が低い若年層の有効回答数を増やすために、標本抽出にあたって 65～84 歳 (高年層)、50～64 歳 (中年層)、25～49 歳 (若年層) の標本数の比が 1:1:2 となるよう配分し、2016 年 7 月 1 日現在の住民基本台帳から無作為抽出しているためである。
- (5) 中央値の推計はいずれも各階層で標本が均等に分布していると仮定しての試算である。
- (6) 子育て支援尺度は小林らによりもともと 60～69 歳の中老年向けに開発された (小林ら、2016) ものだが、小林ほか (2018) により多世代に適用可能であることが実証されている。
- (7) 「粗点が 13 点未満であるか、5 項目のうちいずれかに 0 または 1 の回答があるときには、大うつ病 (ICD) 調査表を実施することを推奨する。」 (Psychiatric Research Unit translated by Awata, 2002) とされているので、5 項目のうちいずれかに 0 または 1 の回答をしたものを含めると、図表 3-11 の値はさらに高くなる (精神的健康状態が低い回答者の比率が増える)。とくに須坂市では 5 項目のうち、(5) 日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった、の評価が 0 ないし 1 の者が多く、合計点が 12 以下のものに加え、5 項目のうちいずれかに 0 ないし 1 と回答したものも含めると、須坂市の 49 歳以下の階層では 5 割を超える。
- (8) 本稿で扱った首都圏 2 区についての WHO-5 を用いた分析については、根本ほか (2018) 参照。
- (9) 旧東京都老人総合研究所 (略称 都老健、現東京都健康長寿医療センター研究所) が開発したもの。